

# “学びをひろげる わたしと〇（まる）人の会” 第 28 回研究会まとめ 私と民族教育運動・民促協（みんそくきょう）

## ～在日 2 世の思いと日本社会 私たちは何をなし、何を残したのか～

2018 年 11 月 10 日 郭政義（カク・チョンイ）さん提案

※ここで使う「朝鮮人」とは、韓国籍、朝鮮籍、日本籍（帰化した人など）、ハーフ（父親か母親が朝鮮人の人）をすべて含みます。

私（松森）が郭さんに“学びをひろげる わたしと〇（まる）人の会”で話してほしいとお願いしたところ、即答で了解していただきました。研究会での話を聞きながら、退職や年齢を機に、ご自身が生きてきた在日朝鮮人としての生き方や運動をまとめ、伝えたいという、並々ならぬ覚悟を決めておられるからではないかと推察しました。

例えば「何より大切にしてきたことといえば自分一人の在日ではなく一世から譲り受けた在日であり三世四世に譲り渡したい在日でもあります。独りよがりの在日であってはならないとも思っています。」といわれます。これほど大きな歴史感覚を、個人が生活化・日常化することは、日本人には到底まねることはできません。在日朝鮮人の切実な暮らしや思索が生み出した力量ではないかと思えます。

郭さんはそれほど大きな「伝える」という作業をはじめておられるのではないかと思いました。それは打ち合わせでいただいたメールの文面にも滲んでいます――

松森さんからお話をいただいた時、この時期区切りをつけようと思っていたこともあり、即引き受けさせていただきました。ただどの様な話をすればいいのか、じっくりと考えてみるとこれまた難しい様に思えてきました。民族教育のことなのか、民族教育促進協議会（民促協）のことなのか、自分の思いなのか、どの辺を主眼に置けばいいのか少し迷います。

ただ人に伝えたいこと知ってもらいたいことは何なのかという視点から話をすればいいのではと思いました。

知ってもらいたい一つに在日としての民族教育運動である民促協の成果や課題も当然ありますが、なぜその様な運動をしようとしたのか、何を目指したのか、という事で、決して自然発生的にできたのではないということです。その過程で学んだ事、身に染みた事もあり、それに賭け、色々な人たちと繋がってきた歴史でもあります。何より大切にしてきたことといえば自分一人の在日ではなく一世から譲り受けた在日であり三世四世に譲り渡したい在日でもあります。独りよがりの在日であってはならないとも思っています。



私たちのスローガン、全ての同胞に民族教育を、誰もが本名を名乗れる社会を、は未だ実現されていません。夜間中学のハルモニは日本語を、ひらがなを学ぶため鉛筆を舐め舐め綴っていましたが、生まれた時からハングルも奪われていたことも忘れません。本名を名乗ることは当然だと言いながら、本名が名乗れる社会、環境づくりが大事だと言いながら本人任せになっている現実を誰が変えるのでしょうか。

連帯と言いつつ、自己の都合に合わせての連帯になっていなかったでしょうか？

その様な視点は外に向けられるものだけではなく自身にも向けられるべきであり、時には傲慢になりがちな自己を律する教養も持ち合わせたいものです。

——郭さんが伝えたいことの核心の一つは、「本名」の問題であろうと思いました。

(配布していただいた資料) 生野中学校の「朝文研だより」で「卒業してゆく在日韓国朝鮮人生徒」に向けて書かれたものがあります。

——・・・私はちっちゃな町工場のオーナー兼従業員であり、民族的な教養も持ちあわせてはおりません。それゆえ、きっちりした知識や歴史、朝鮮語も不十分ではありますが、しかし、少なくとも私の思いだけは分かってくれるはずだと信じています。

「私の思い」—それは、朝鮮人はすばらしいとか、日本人に負けるな、というものではありません。持って生まれたものを大切にすることです。自分というものを正しく見つめるということです。

特に朝鮮人である君たちが、朝鮮との正しく当然の出会いがかつてあったのだろうかと思うのです。他人から、社会から与えられた朝鮮のイメージによってのみ朝鮮を感じている。本当の朝鮮との出会いを知っているのなら、逃げも隠れもしないひとりの朝鮮人が生まれると思うのです。

ただ、残念なことに、この日本の社会では、いまだ朝鮮に対する偏見や差別があります。そのことは君ら自身がいちばんよく知っているかもしれません。それゆえ、本名が正しいと知りつつも、日本名を名のり、なにげなく、さりげなく、朝鮮を遠ざけているのでしょう。

在日外国人に課されている指紋押捺も、実際は、その多数を占める在日朝鮮人に対して、政府や警察が管理を目的にしてされる、法的な差別であることは、多くの人の認めるところです。

このような社会の中で、朝鮮人として自覚を持ち、本名を名乗ることは、ある意味では勇気のいることかもしれません。しかし、この社会で残っている差別の本質は、本名を名乗ることに対してではなく、その人が朝鮮人であることに対するものなのです。本名による差別があるとすれば、それは単に名前の問題ではなく、つきつめれば朝鮮人を否定し、日本人になりなさいよ、という民族差別だと思うのです。通名というのは、実際は「日本名」なのです。・・・

---

「本名」の問題を日本人教師であった松井さんが受け止めて書いてくれました。

意見交流会で私が考えたこと。

松井直哉

郭さんが歩んできた道のりを聞きつつ、意見交流では在日韓国・朝鮮人の本名を使って生きる、ということが話題になった。

私（松井）はこれまでも、日本人である私が「本名を使って生きる」というテーマで子どもたちとどう向き合っていくのか、という問題の立て方をしてきた。

郭さんは「本名を使うことを基本にするべき」と言い切る。もちろんその方針に異存はない。実際に東大阪市に勤めている時、「在日韓国・朝鮮人の集い」に向けた発表練習の場で、普段通名を使って生活している児童に、若いソンセンニムが本名で呼びかけ、それがだんだん当たり前になっていくその場の空気にはすがすがしさを感じた。そしてその若いソンセンニムの、決意を持った生き方を見せるという教育活動は、まぶしさを感じたものだ。

しかし、だからと言って日本人である私が、在日の韓国・朝鮮人の子どもたちに本名を使うことを薦めることには少々抵抗を感じてしまう。郭さんの「本名を使うことを基本にするべき」という言葉は郭さんの在日韓国人としての生き様を背景にしているから重みがあり説得力がある。私が同じ言葉を使ったとして、「じゃあ、お前はどんな生き方をしているのか？」と問い返された時に何と答えられるだろう。

日本人としてできることをしっかりやっている後姿を子どもたちに見せつつ、「本名を使うことを基本にするべき」といつているのだろうか。

「本名を使う」という問題は、結果として本名を使うかどうかということより、日本人も含めた一人ひとりの生き方を問う問題なんだな、と改めて思った。――



日本人大学生のIさんは、小学校に民族学級があって関心を持ち、中学校で朝文研に参加したという経験を語りました。Iさんの友人である韓国人のSさんは、日本と韓国の若者の懸け橋になりたいという目標を語りました。民族講師のYさん、民族保護者会のKさんは、普段の郭さんから聞けなかった話を知れた喜びを言いながら、もっと多くの人に聞

いてほしいとの願いを語られました。他の日本人の参加者からは、子ども時代や、韓国映画を通して話、教員としての立場など、それぞれの経験を通して話が活発に交流されました。

郭さんがさらりと語る「朝鮮人に対して北風が吹くからマントをかぶっているのもあって、太陽が照ればマントをかぶる必要はない」との言葉は、とても示唆的なものでした。

郭さんの生い立ちから、運動との出会い、民促協の結成、民族教育団体としての活動など、その幅広い話をまとめることは、とても私の力で適うものではありません。しかし、大阪で取り組まれてきた民族教育、在日朝鮮人教育は、決して「国際理解教育」としてひとくくりにできない実践と歴史をもっています。そのとば口なりともものぞいてもらうきっかけになればと思います。

「在日朝鮮人の問題は、日本人の問題である」、かつて何度も自らに問い返した言葉を、私もいま改めて考えています。

郭さんたちは、毎年「就職、労働、民族学校、教育」など、オールラウンドの課題を大阪府と教育委員会相手に交渉を重ねています。また、その交渉のお知らせもしたいと考えています。

#### ※民族教育促進協議会（民促協）

1984 12 月にもたれた民族教育の制度的保障を求めるシンポジウムを契機につくられる。大学教員懇、高麗労連、民族教育をすすめる連絡会などが事務局を構成、

代表に故金東勲先生 事務局長に郭政義、その後代表になる。2003 年解散する。

郭政義

1953 年 大阪市生野区生まれ 在日二世

1972 年 在外教育研究所 入所（ソウル）

1984年～1989年 大阪市立生野中学 朝鮮文化研究会指導（民族講師）

1999年 東大阪市立大平寺中学校夜間学級 講師

2005年大阪市立北鶴橋小学校 府費民族講師 ～2013